

三十一・藏岡凌平 一回生

臨書 楷書 鄭道昭『鄭義下碑』 半切

「樂道據德依仁孝弟端雅寡言愍行六籍孔精百氏備究八素九丘靡不昭達至乎人倫禮式陰陽律曆尤所留心」

よく見るいわゆる楷書とは明らかに違う線質ながら、かつ美しい字が形作られているところに惹かれ『鄭義下碑』を臨書しました。篆隸と見紛うような始筆・終筆、線の独特な曲がり、微妙な太さの変化……と、書く身としては案の定次々と難点に出くわす道のりでしたが、そこが書の面白さでもあると感じました。

樂道據德依仁孝弟端雅寡言愍行六籍  
孔精百氏備究八素九丘靡不昭達至乎  
人倫禮式陰陽律曆尤所留心 凌平臨

三十二・小島健史 二回生

創作 前衛 『溶岩』 半切四分の一

「爆」

底に溜まったエネルギーが、連鎖の上で漸く噴火する。そんなイメージが皆様に伝わったならば、この作品は完成です。



三十三・小島健史 二回生

臨書 楷書 褚遂良『雁塔聖教序』 全紙

「蓋聞二儀有象頭覆載以含生四時無形潛寒暑以化物是以窺天鑒地庸愚皆識其端明陰洞陽賢哲罕窮其數」

大学入学から書道を始め、最初に書き上げた書道作品が『雁塔聖教序』の臨書でした。半年も練習して出展したその作品は決して納得の出来るものではなく、その後も一年間書道を学び、もう一度「楷書の最高傑作」に挑戦をさせて頂きました。一先ずは成長出来ているのかな、と思いますが、まだまだ至らぬ点ばかりです。ご批評の程よろしくお願いいたします。

蓋聞二儀有象顯覆載以  
含生四時無形潛寒暑以  
化物是以窺天鑒地庸愚  
皆識其端明陰洞陽賢哲  
罕窮其數 雁塔聖教序 健史臨

三十四・河原理恵 二回生

臨書 楷書 『魏靈藏薛法紹造像記』 三尺×八尺

「下代茲容厥作鉅鹿魏靈藏河東薛法紹二人等乖豪光」

とにかく迫力のある作品を作りたいという思いから、造像記を三尺×八尺の紙に書き額に入れて展示しました。払いや横画の伸びやかさを残しつつ、始筆や点画・右上がりの角度を強調して書き、力強さを表現しました。

下代茲容厥作鉅  
魏靈藏河東薛法紹  
二人等乖豪光

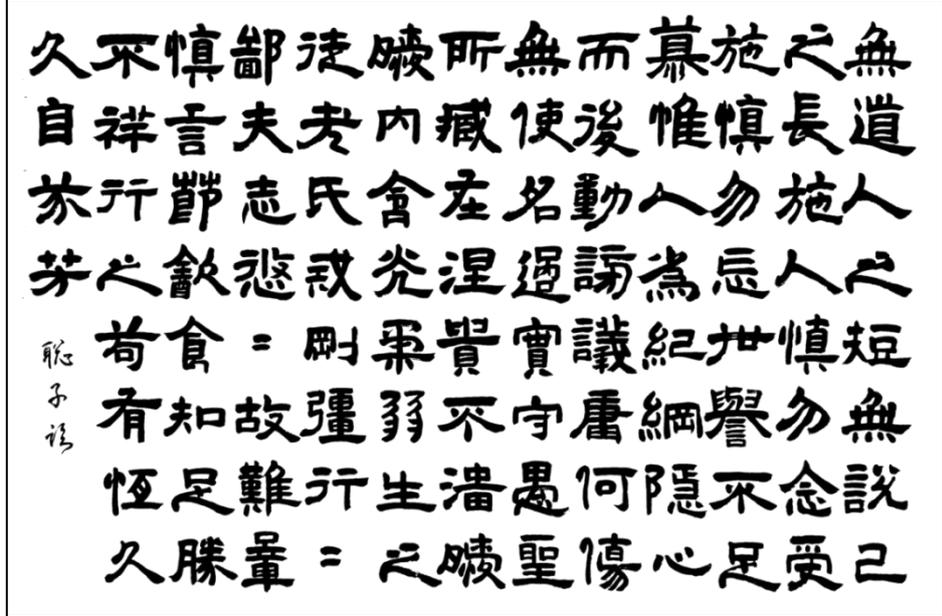
理恵臨

臨書 隸書 鄧石如 『隸書崔子玉座右銘』 全紙

「無道人之短。無說己之長。施人慎勿念。受施慎勿忘。世譽不足慕。唯仁為紀綱。隱心而後動。謗議庸何傷。無使名過實。守愚聖所臧。在涅貴不緇。曖曖内含光。柔弱生之徒。老氏誠剛強。行行鄙夫志。悠悠故難量。慎言節飲食。知足勝不祥。行之苟有恒。久久自芬芳。」

漢の政治家である崔瑗の座右の銘を鄧石如が書いたものを臨書しました。最初は

一目惚れだったので、調べると素晴らしいことが書いてあると分かってますます好きになり、書いていてとても楽しかったです。言を慎み飲食を節し、足るを知りて不祥に勝つ…。なんだかできていないことばかりな気がします、これから精進していききたいです。



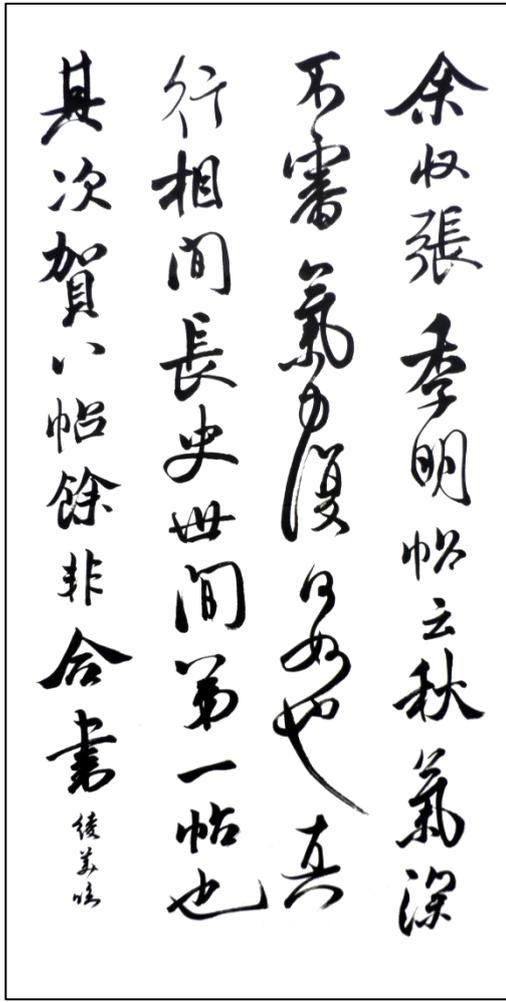
創作 書体無し 『環—めぐる—』 90cm×60cm

「環」  
年は終わりを迎えても、季節はめぐり繰り返す。季節のみならず、自然界のあらゆるもの——土・水・大気、天体、或いは血液——は、循環するのが常である。ある者曰く、歴史も繰り返すものらしい。またある者曰く、衆生の魂さえ：



「余収張季明帖云秋氣深不審氣力復何如也眞行相間長史世間第一帖也其次賀八帖餘非合書」

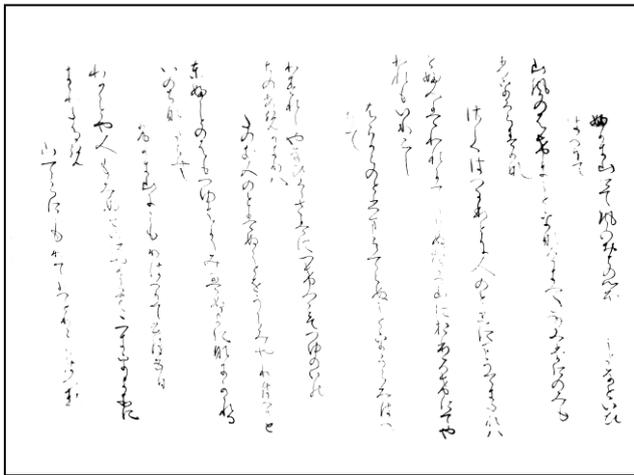
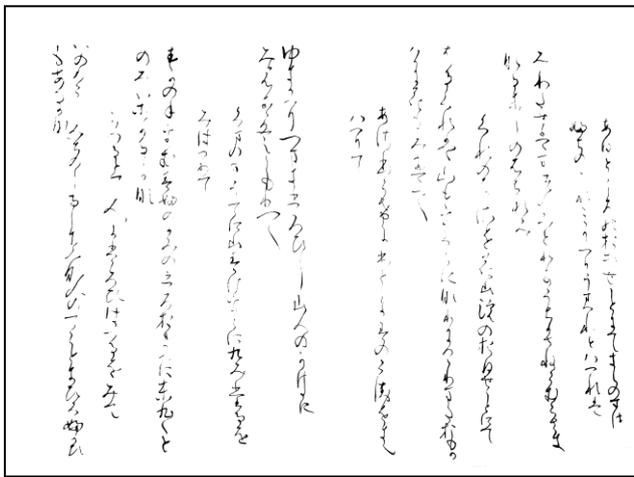
自分の勉強不足、努力不足は否認ませんが、卒業制作となる今回の書展で、一番好きな米芾さんの字を臨書できたことはとても嬉しいのです。



「ふ(婦)か(可)き(支)山にて、風のおとの心ほ(本)(そき)ことな(奈)といひはべりて

山風のは(者)げ(希)しき(支)ことを(乎)な(那)げ(介)き(支)つゝな(奈)みだ(堂)にのみもひ(悲)を(乎)くらす(春)か(可)な(那)・・・」

藤原行成の針切を臨書しました。針切の特徴である名前通りの針のような鋭さを表現するのが難しかったのですが、少しずつ慣れてきました。しかしながらまだまだ未熟な部分も多々あります。これからも仮名の美しさを味わいつつ鍛錬を続けていきたいと思えます。



三十九・神保里帆 一回生

臨書 楷書 光明皇后 『樂毅論』 半切

「夫求古賢之意宜以大者遠者先之必迂廻而難通然後已焉可也今樂氏之趣或者其未尽乎而多劣」

何カ月か書いてからようやく原本通りに書くことの大切さに気づかされた作品です。樂毅論らしい字体に見えていれば幸いです。

夫求古賢之意宜以大者遠者先之必迂  
廻而難通然後已焉可也今樂氏之趣或  
者其未盡乎而多劣

里帆臨

四十・鈴木貴也 三回生

臨書 行書 徽宗 『蔡行勅卷』 半切

「成職不有總難以集序」

一文字一文字がそれだけで作品にできそうな、原本の右上がり気味な字形と、鋭い線筆の格好良さから衝動的に題材を決めました。その感動を伝えることができれば幸いです。ご批評よろしくお願いいたします。

成職不有總難以集序  
朕肇建綱領之官

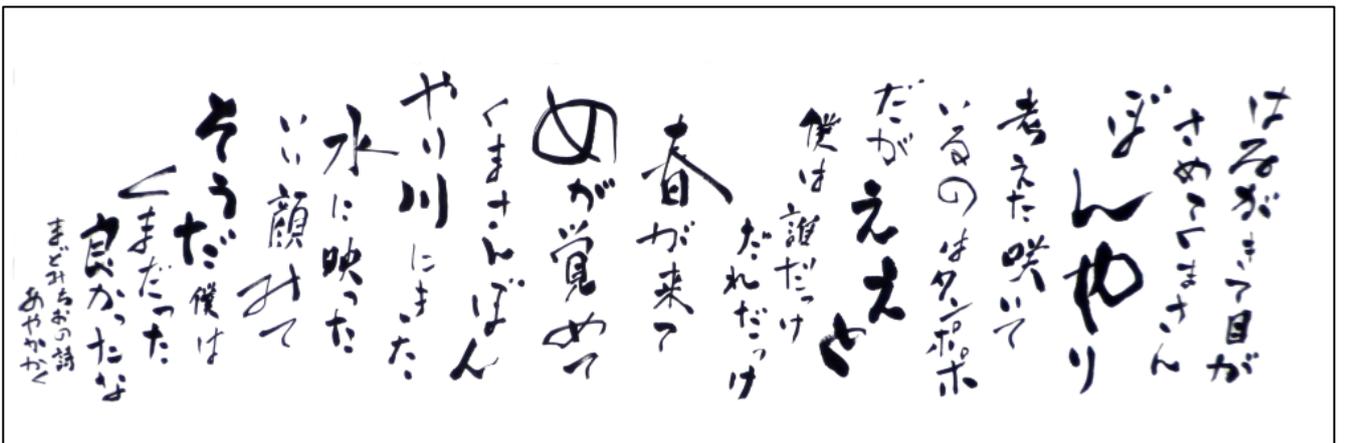
貴也臨

四十一・杉本綾香 四回生

創作 調和体 『くまさん』 半切

「はるがきて 目がさめて くまさんぼんやり 考えた 咲いているのはタンポポだが ええと 僕は 誰だっけ だれだっけ 春が来て めが覚めて くまさんぼんやり 川にきた 水に映ったいい顔みて そうだ 僕は くまだった 良かったな」

この字体も半切横という形式も私にとつては挑戦でしたが、「くまさん」の言葉のあたたかさや心地よさを表現してみたくて創作しました。どの文字も個性があつて楽しいリズムカルな作品イメージです。まだまだ寒い季節ですが、ぼんやりしつつも早く春を待とうかなと思います。



四十二・鈴木新人 四回生

創作 調和体 『不思議』 三尺×六尺

「私は不思議で堪らない 黒い雲から降る雨が 銀に光っていることが 私は不思議で堪らない 青い桑の葉食べている 蚕が白くなること が 私は不思議で堪らない 誰も弄らぬ夕顔が 獨りではらりと開くのが 私は不思議で堪らない 誰に聞いても笑ってて 当たり前だと言っていることが」

調和体というと、漢字と仮名が両方あつて難しそうでしたが、あえて挑戦しました。質の高いものになつていれば幸いです。

私は不思議で堪らない

黒い雲から降りる雨が

銀に光っていることが

私は不思議で堪らない

青い桑の葉食べている

蚕が白くなることか

私は不思議で堪らない

だれも弄らぬ夕顔が獨

りではらりと開くのが

私は不思議で堪らない

誰に聞いても笑つててあ

たり、前だと言っているか

四十三・石博昭 二回生

創作 楷書 『従軍行』 二尺×三尺

「三邊烽亂驚 十萬且橫行 風卷常山陣 笳喧細柳營 劍花寒不落 弓月曉逾明 會取淮南地 持作朔方城」

少ないながらも、自分の臨書経験を消化する為に創作をした。北魏楷書らしさとは何か、という自問に答えが出せていれば幸いである。

三邊烽亂驚十萬且橫行

風卷常山陣笳喧細柳營

劍花寒不落弓月曉逾明

會取淮南地持作朔方城

會と霜月上隣  
従軍行博昭本

四十四・篠原理那 一回生

臨書 草書 王鐸 『寄金陵天目僧詩』 二尺×八尺

「別去西江上江灘寓短亭・・・」

初めての二八作品で、以前から書きたかった王鐸の書を臨書しました。文字の大小などの細かな特徴を捉えながらも一つの作品にまとめあげるのに苦労しました。まだまだ稚拙な点は多いですが、ご批評のほどよろしくお願ひします。

別去西江上江灘寓短亭望天雲  
白鳥岫皆青寺内焚經篋人間老  
歲墨時移分史室百次指樓  
螢寄金陵天目僧

篠原理那  
臨

四十五・鈴木新人 四回生

創作 草書 『採蓮曲』 二尺×八尺

「江南當夏清桂楫逐流縈初疑京兆劍復似漢冠名荷香帶風遠蓮影向根生葉卷珠難溜花舒紅易傾日暮鳧舟滿歸來渡錦城」  
以前までは、紙と向かい合ってからはじめて、筆を紙に、合わせて、書くという心構えでありましたが、紙と向かい合うまでにどれだけのをしてきたのか、どのような準備をしてきたのかで作品の質が大きく変わるのだということを知りました。

江南當夏清桂楫逐流縈  
初疑京兆劍復似漢冠  
名荷香帶風遠蓮影向根生  
葉卷珠難溜花舒紅易傾  
日暮鳧舟滿歸來渡錦城

四十六・宗哲仁 一回生

臨書 行書 王羲之 『蘭亭叙』半切

「會稽山陰之蘭亭修禊事也羣賢畢至」

羣、賢、畢の三文字が魅力的に思えたので、この部分を書きたいと思いました。構成がなかなか決まらず苦労しましたが、作品を出すのもこれで二度目となり、初めての時のよりはどっしり構えて書くことができたと思います。未熟な作品ですがどうぞよろしくお願いします。

會稽山陰之蘭亭脩禊  
事也羣賢畢至  
哲仁臨

四十七・辰巳鴻介 二回生

臨書 楷書 吳熙載 『楷書東方朔画贊四屏』 半切

「故談諧以取容潔其道而穢其跡清」

滲みと掠れがだしたかったんです

故談諧以取容潔其  
道而穢其跡清  
鴻介臨

四十八・高垣茜 修士二回生

臨書 行草書 張瑞図(上)「杜甫飲中八仙歌卷」(下)「張瑞図詩卷」全紙1/2

「杜甫飲中八仙歌卷」五斗方卓然 高談雄辯驚四筵 天啓丁卯春書 瑞圖

「張瑞図詩卷」 躊躇不忍下層崖 我意何異登天台 崇禎癸酉 白毫庵瑞圖

字は人の心を表すというが、その人が置かれている状況によって、あるいは齢を重ねるにつれてどう変わるのだろうか。

張瑞図に注目し、『杜甫飲中八仙歌卷』(五十八歳：政務を掌るかたわら書画の生活に明け暮れしていた頃、都の北京にて)と『張瑞図詩卷』(六十四歳：官位剥奪後、郷里にて)を対比させようと試みた。

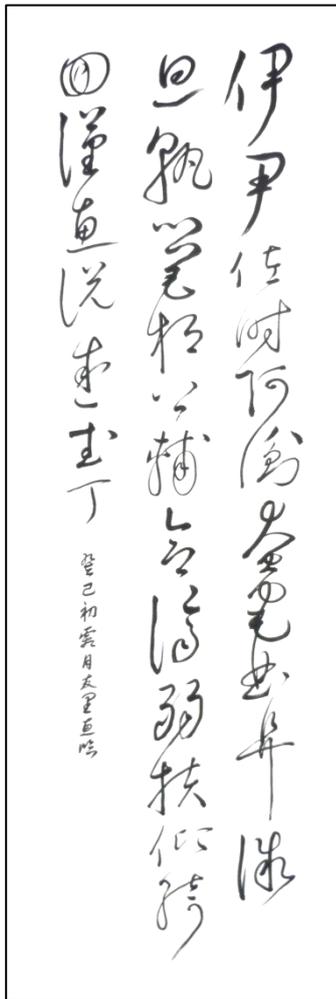
五斗方卓然	躊躇不忍下層崖
我意何異登天台	我意何異登天台
高談雄辯驚四筵	我意何異登天台
天啓丁卯春書	天啓丁卯春書
瑞圖	白毫庵瑞圖

四十九・武井友里恵 四回生

臨書 草書 徽宗 『草書千字文(部分)』 約60cm×190cm

「伊尹。佐時阿衡。奄宅曲阜。微且孰訥。桓公輔合。濟弱扶傾。綺回漢惠。說感武丁。」

最初は「作品集の表紙に載っていてかつこよかったから」という安易な理由で選びましたが、高校生のころからずっと書きたかった草書を書いてとても嬉しいです。集大成と呼ぶには少し力不足ではありますが、精一杯書くことができてとても楽しかったです。



五十・多門千早 三回生

臨書 行書 黄庭堅 『王史二墓誌稿』 二尺×六尺

「人了元東林道人常摠皆攝杖屨往游其藩」

この原本の字の、柔らかいけれど凛としていて、その二つの面が表現できたらと思いつきました。柔らかく優しいのだけど内にはぶれない芯の強さがあるというの私の理想の人物像でもあります。ご批評のほどよろしくお願ひします。



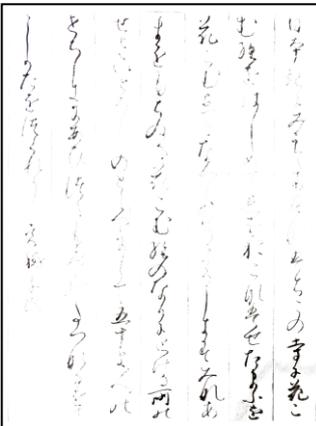
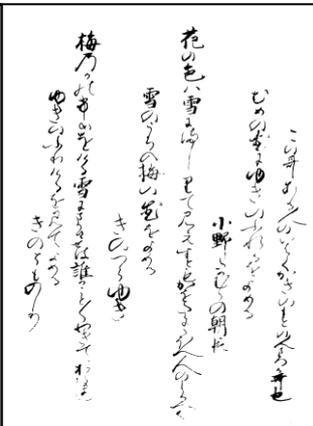
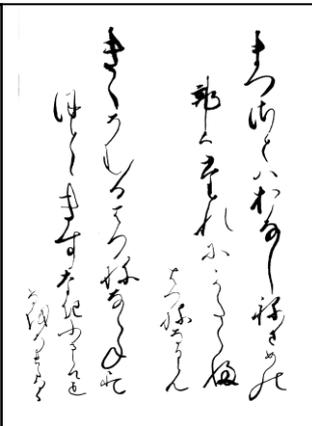
五十一・寺田実穂子 3回生

臨書 仮名 『金剛院切』 『三輪切』 『東大寺切』

H27.3cm×W12.6cm H23.2cm×W14.6cm H25cm×W16cm

「まつさとはおなしねさめの 郭公たれにかたらふ はつねなるらん きぎそむるはつねならねと ほとときすなきふるしても なおそまたるる」

二百以上の古筆が収められた手鑑「藻塩草」から三作品。手鑑に、集めた人の心を引き付けた古筆が詰まっているように、私も書きたいと思ったものを選びました。三枚を並行して書くことで、他で学んだことや書き方の違いがよく分かり、とても勉強になりました。



五十二・辰巳鴻介 二回生

臨書 楷書 褚遂良 『楷書千字文』 三尺×六尺

「辰宿列張寒来暑往秋収冬藏閏餘成歲律召調雲騰陽致雨露結爲霜金生麗水玉出崑崗劔號巨闕珠称夜光果称李奈菜重芥薑海鹹河淡鱗潜羽翔龍師火帝鳥官人皇始制文字乃服衣裳推位讓国有虞陶唐吊民伐罪周發殷湯坐朝問道垂拱平章育黎首臣伏戎羌遐邇壹体率賓歸王鳴鳳在樹白駒食場化被草木賴及万方蓋此身髮四大五常恭惟鞠養豈敢毀傷女慕貞絜男效才良知過必改得能莫忘罔談彼短靡恃己長信使可覆器欲難量墨悲糸染詩讀羔羊景行維賢剋念作聖德建名立形端表正空谷傳聲虛堂習聽禍因惡積福緣善慶尺璧非寶寸陰是競資父事君曰嚴与敬孝当竭力忠則盡命臨深履薄夙興温清似蘭」  
楷書が好きです。大好きです。

辰宿列張寒来暑往秋収冬  
霜金生麗水玉出崑崗劔號  
河澹鱗潜羽翔龍師火帝  
虞陶唐吊民伐罪周發殷湯  
遐邇壹體率賓歸王鳴鳳在  
四大五常恭惟鞠養豈敢毀傷

五十三・寺西幸 三回生

創作 かな 『伊吹山』 半切

「かくとた(多)に(二) えや(哉)は(八)伊吹のさしも草 さ(沙)し(志)もしら  
し(四)な(奈)もゆるおもひ(日)を(遠)」  
すとん、とした和装のような雰囲気仕上げたいと思って書きました。

五十四・徳川鈴奈 一回生

臨書 行書 蘇軾 『黃州寒食詩歌卷』全紙

「自我來黃州已過三寒食年々欲惜春々去 容惜今年」  
縦に長い字を書きたいと思い、この法帖の「年」という字に惹かれ、これを書くことに決めました。全紙に三行書くのは初めてで、パンフレットの作品では、行書特有の揺れが満足に書けなかったのですが、展示作品は、揺れに気を付けて書きました。

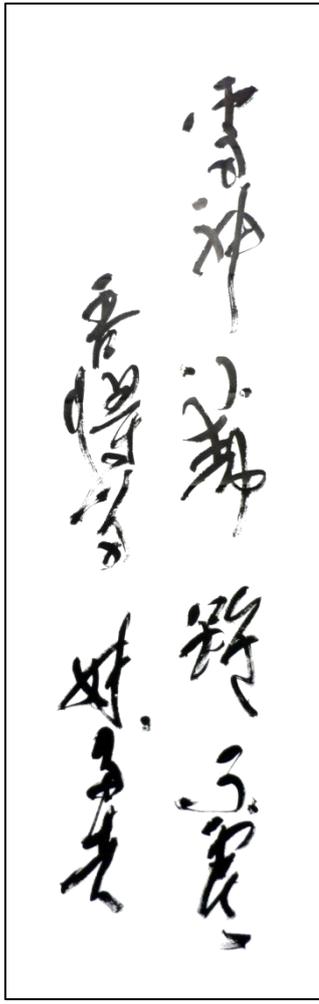
自我來黃州已過三  
寒食年々欲惜春々  
去不容惜今年 鈴奈臨

五十五. 中川和也 修士一回生

創作 草仮名 「雨が降らなくなつて」 半切

「雷神少動雖不零吾將留妹留者（鳴る神の少し響（とよ）みて降らずとも吾は留まらむ妹し留めば）」

「雷神」はカミナリ。「科学」が幼稚だった古代のオジヨウサマには、さぞ恐ろしいものだったはずだ。——それでも彼女は雷雨を望む。「鳴る神の少し響みてさし曇り雨も降らぬか君を留めむ（万葉集・巻二・3514）」…雨が降ってきたらサ、もうちよつとココにいてくれる？…：雨が降らなくなつて、君が「行かないで」って言うてくれるなら…：  
——イジワルだなあ。と思つてしまう。



五十六. 永溝聡士 修士一回生

臨書 行書 文徵明『南樓傷春詩』 一尺×五尺

「南樓三月盡飛絮滿江城野色烟中斷斜陽雨外明帖鏡簷風燕燕千樹煖鶯鶯歲有傷春感兼茲白髮生」

なかなかうまくいかないですね。



五十七. 中谷百花 二回生

創作 行書 『静夜思』 半切四連

「牀前看月光 疑是地上霜 舉頭望山月 低頭思故郷」

月っぽい作品を書いてみたいと思ひ、李白の静夜思という漢詩を題材に創作しました。窓から差し込む月の光を見て、その白く美しい輝きをきっかけに故郷のことを思い出した、という内容です。静かで神秘的な月の魅力が作品を通して伝わればうれしいです。

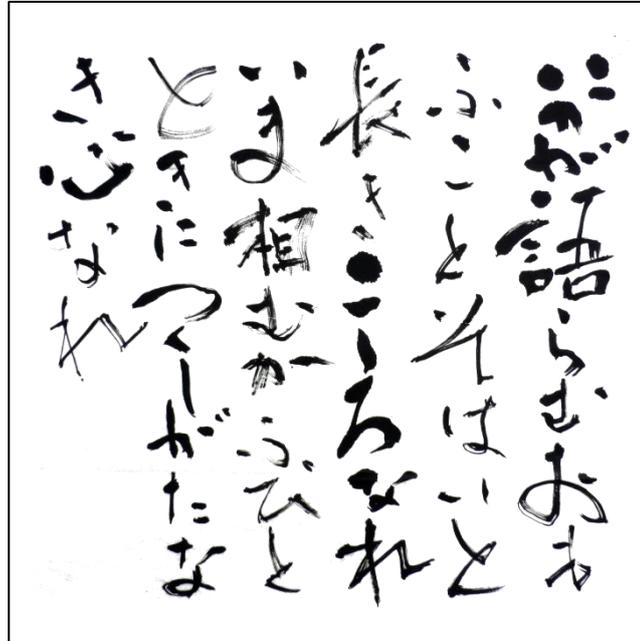


五十八. 中谷百花 二回生

創作 調和体 『いかが語らむ』 全紙二分の一

「いかが語らむ おもふこと そはいと長きこゝろなれ いま相むかふひとと  
きにつくしがたなき心なれ」

与謝野晶子の詩篇『恋衣』より、「いかが語らむ」の冒頭部分を、ぽつ、ぽつと  
女の子の口からこぼれ出るようなイメージで書きました。ご批評よろしくお願  
いします。

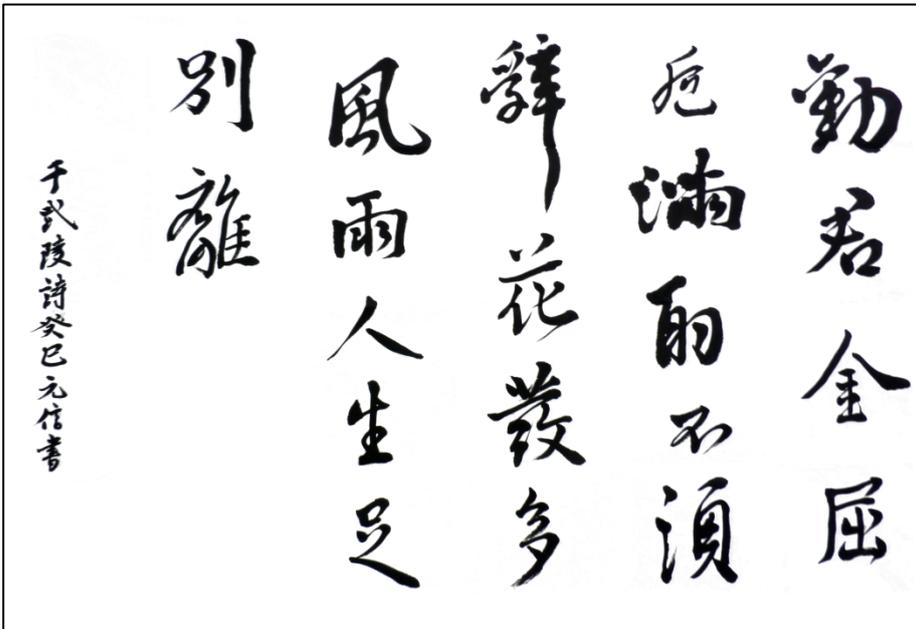


五十九. 仁位元信 四回生

創作 行書 「勸酒」 全紙四分の三

「勸君金屈卮滿酌不須辭花發多風雨人生足別離」

四回生となり最後の作品として好きな漢詩を作品にしました。四年間お世話にな  
った部の仲間たちへの思いも込めて書きました。以下井伏鱒二によるこの詩の意  
訳です。「この杯を受けてくれ どうぞなみなみ注がしておくれ 花に嵐のたと  
えもあるぞ さよならだけが人生だ」



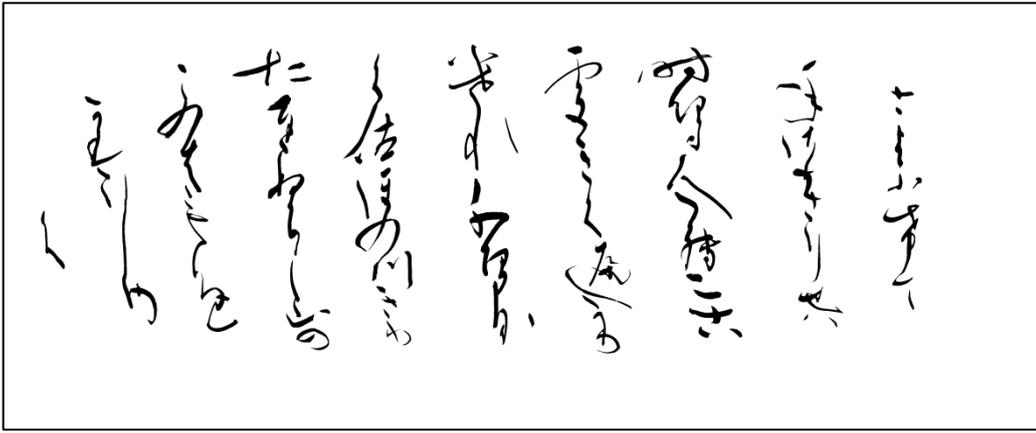
千代陵詩癸巳元信書

六十・橋詰奈央 三回生

創作 かな 『さ夜更けて・』二尺×六尺

「さ夜更けて 寝覚めざりせば 時鳥 人つてにこそ 聞くべかりけれ 千鳥鳴く 佐保の川霧 たちぬらし 山の木の葉も 色かはりゆく」

次々と畳み掛けるような行の流れを意識して、練習をしてきました。自分の仮名の理想である、「凛とした線質」に少しでも近づぐことができていたら嬉しいです。

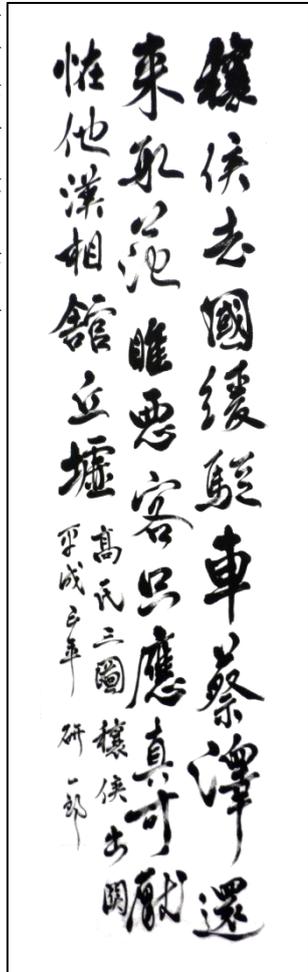


六十一・疋田研一郎 一回生

臨書 行書 米芾 『穰侯出關詩帖』 半切

「穰侯去國緩駟車蔡澤還

半切に三行ということで一つ一つの文字が小さくなっても、迫力に欠けるということのないように、それでいて米芾の特徴である上品さを失わないように心掛けて書きました。

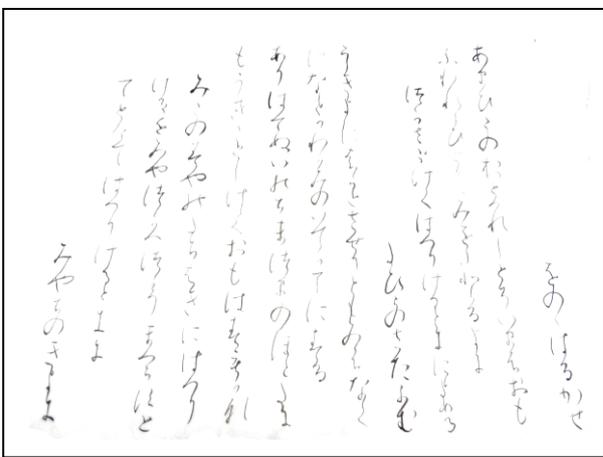


六十二・檜山葵 三回生

臨書 かな 伝紀貫之 『高野切第三種』 半懐紙

「をのはるかぜ あまびこのおとづれじとぞいまはおもふわれかひとかともをたどるよに…」

一年前に書いた高野切に再び挑みました。その美しさに書いていると心も洗われる、思い出深い作品です。成長のほどは果たして…。



六十三・藤田雄也 二回生

臨書 行草 傅山 『行草五言古詩卷』 全紙

「狼籍等杏李厥田唯下々厥貢海物美人閩之風味日輸沙塞飛鄙即此大功德救濟業梓豈但波羅蜜布施方外士編戶不知覺」

行草書体が好きなので、今回もそういう作品を選びました。初めての全紙でスペースの埋め方に苦労し、とりあえず五行で書いてみることにしました。配置や文字の強弱などまだまだなので、本番までにしつかりまとめたいです。

粒心精奇杏李類田唯下、  
類貢海物美人閩之風味日輸  
沙塞飛鄙即此大功德救濟業  
梓豈但波羅蜜布施方外士  
編戶不知覺 姓世徳

六十四・中野綾香 二回生

臨書 仮名 伝源俊頼 『元永本古今和歌集』 136cm×20cm

「古今和歌集巻第八

人の華山にまうで、ゆふつかたかへらんと しけるに 遍照  
夕暮のまがきは 山となむむ よるはこえじとやどりとるべく  
中納言兼輔 君が行こしの 白山しらね 靱雪の間にまに〜 あととはたづね  
む・・・」

いろいろな表情を持つ、豪華で華麗な書に魅力を感じました。私の感じたそんな魅力を、見る人に少しでも感じてもらえれば、うれしく思います。

夕暮れまうで  
ゆふつかたかへらんと  
しけるに  
遍照  
人の華山にまうで  
ゆふつかたかへらんと  
しけるに  
遍照